［科目区分］：リーダーシップ開発コース・教育実践開発コース
［授業科目名］：生徒指導・進路指導の実践研究
［登録学生数］：22

令和５年度「授業評価・授業研究報告」

教育学研究科　城戸　茂

１　授業概要

本授業は、教育実践高度化専攻の１回生を対象とした専攻共通基礎科目である。本授業の目標は、①生徒指導及び進路指導の現状と課題について理解すること、②生徒指導・進路指導に当たる教員への指導・助言の観点を示すことができることの２点とした。

また、中核的なＤＰとして、「3. 学校経営や教育実践をめぐる現代的諸課題について、幅広く専門的な知見をもとに、その対応方策を適切に考え、高度な実践力をもって学校経営・教育活動に取り組むことができる〔思考・判断・表現〕」及び「4. 学校に対する社会のニーズと自己の学習課題・研究課題を明確に意識し、実践を省察しつつ先導的に学習し研究する高度な教育実践力をもった専門的職業人として、自己の使命と責任とを自覚し、自主的に社会に貢献しようとする〔関心・意欲・態度〕」を掲げて取り組んだ。

授業内容については、生徒指導・進路指導の現状から取り組むべき課題を考察し、その改善に向け、関係機関や専門家等との連携を図りながら学校全体で組織的に取り組んでいくための方策について具体的事例を基に検討していくことを中心に構成した。

授業形態は、最新の学術成果について講義形式で学ぶ部分と、学校現場で話題になることが多いいじめや不登校、反社会的行動のほかキャリア教育に関する事例を基に、学部時代や学校現場で身に付けた知見を活用してディスカッションする場面を効果的に位置付ける構成を基本とした。さらに、集中講義の利点を生かし、児童自立支援施設を訪問し、生徒指導や進路指導上の困難を抱える児童生徒に対する関わり方について、実際の指導場面を観察したり、職員の体験談を聞いたりするなど実践的な学習を行った。

２　昨年度の授業評価に見る成果と課題

昨年度は、講座終了後に提出のあったリポートを基に評価を行った結果、次のような成果と課題を指摘することができた。

〔成果〕

・ほとんどの学生が本講座で学んだ知識やこれまでの学習や教職経験で身に付けた知識を活用し、事例や訪問見学での学びを深めている様子がうかがえた。〔思考・判断・表現〕

・多くの学生が本講座で学んだ生徒指導、進路指導に関する知見を踏まえ、教壇に立った時、学んだことの実践を指向している様子がうかがえた。〔関心・意欲・態度〕

〔課題〕

・受講後に提出したリポートの自由記述のみを基に評価を行ったため、評価の曖昧さが残った。

３　本年度の取組

昨年度は、本講座のねらいがおおむね達成できたと見ることができるものの、評価方法に課題が見られたため、授業評価自体にも疑問が残る結果となった。そこで、本年度は、評価の場を複数設定し、できるだけ様々な角度から評価を試みることで、評価結果の客観性を高めるとともに授業改善に繋げたいと考えた。

本年度、評価対象としたものは、受講後のリポートに加え、講座の中程で行った小リポートと意識調査である。

表１は、講座途中の段階で作成した小リポートの中の記述の例である。座学を中心に行った学習では、22 名の受講者のうち、抽出学生Ａ・Ｂの２名について、生徒指導に関する学習の中で学んだはずの自己存在感や自己決定の概念が、実際の授業場面で具体に当てはめて説明できていない様子がうかがえる。一方、表２は、講座最終日の施設訪問の後に作成した最終リポートの中の記述の例である。抽出学生Ａ・Ｂは、表１の抽出学生と同じ学生であるが、座学の段階では十分に理解できていなかった生徒指導の概念が正しく修正されている様子がうかがえる。

なお、講座途中で行った意識調査では、「知

識・理解」と「関心・意欲・態度」の２つの観点について調査を行ったが、14 名全ての学生が「４　かなり達成」となっていた。

以上のことから、講座の途中にも評価場面を設定することで、学生の学びの変容の様子を把握できるとともに、より客観性の高い評価につなげることができることを改めて確認することができた。

また、本年度の取組を通して、授業を構成する上では、座学による抽象度の高い学習の後に、見学や観察などの具体を通して学ぶ場を設けることが理解を深める上で効果的であること、講座の途中に形成的な評価を行うことによって、一人一人の学生の状況を把握し、指導の改善に活かすことができることについて、改めて確認することができた。

４　実践的指導力の育成を目指す取組について

本授業は、理論と実践の往還を目指し、基本的な事項と最新の研究成果等を学んだ後、具体的事例を基にディスカッションすることを通して、理解を深めるとともに、施設訪問を行い生徒指導・進路指導に関する質の高い実践に触れることで一人一人の学生の学校現場での実践意欲を高めることができるように授業設計を行った。こうした成果の一端は、表で示したリポートの記述の変容に見ることができる。

教員養成の場においては、授業で学んだことが将来の教壇での実践につながることを意図して実施することが大切であり、教職大学院においてはその質も問われるところである。幸いにも、本教職大学院には優れた力量を身に付けた現職教員が複数在籍していることから、現職教員の好ましい影響がストレートの学生にも効果的に及ぶよう授業構成を今後も更に工夫していきたい。

５　今後の課題

本年度の取組を踏まえ、次年度の検討課題として次の３点を挙げることができる。

１点目は、表３に見られるように、昨年度、本年度共に本講座のねらいとする「関心・意欲・態度」は比較的高いものの、「技能」のＤＰ対応授業評価が比較的低いことから、個々の授業設計の精度を一層高めることである。その際、将来、ストレートの学生が教壇に立つ場面を意識するとともに、現職教員にとって一定の質の高さを保障できるよう内容の構成や学習形態等の工夫を図りたい。

２点目は、理論と実践の往還が求められる教職大学院においては、知識の習得と知識の活用を通した能力育成の両面を重視しながら取組の質を一層高めていくことである。

３点目は、自発的な授業外学習の状況を把握し、その結果を返すことにより、より主体的な学びを保障していくことである。充実している学生の状況を授業の中で紹介するなど、形成的な評価を活用して意欲化を図りたい。

これら以外にも、改善事項は考えられるが、次年度は特にこの３点について重点的に取り組みたい。

〔表１〕座学における思考・判断・表現（講座途中の小リポートの記述例）

学生	学習事項を基に考えた授業の中で行う生徒指導の具体例
A	江戸時代の単元の学習が一通り終わった時点で、学習したことを自分なりにまとめさせたり疑問を書かせたりすることが、自己存在感を育てることにつながる。
B	授業の中で、グループ学習を十分に取り入れ、自分の意見や考えを整理させることが自己決定の力を育むことにつながる。

〔表２〕観察学習を通した思考・判断・表現（受講後のリポートの記述例）

学生	児童自立支援施設に見られた生徒指導上の工夫
A	少人数の学級であったが、先生のコメントや掲示の仕方を工夫するなど、一人一人の掲示物を大切にしている様子が十分に見られ、自己存在感を与えるような仕掛けが見られた。
B	教室や寮には一日の流れや清掃の仕方など、やるべきことを「見える化」した掲示物が見られた。こうしたことは、好ましい自己決定に導いていく上で効果的な方法であると感じた。

〔表３〕教職大学院ＤＰ対応授業評価結果（4 件法：4 かなり達成　3 やや達成　2 あまり　1 全く）

	知識・理解	技能	思考・判断・表現	関心・意欲・態度
2022	3.5	3.2	3.5	3.7
2023	3.6	3.3	3.7	3.8